

2 本校の学校教育努力点とその推進計画

名古屋市立浦里小学校

I テーマ 自分から学び、考え、やりぬく浦里っ子

～多様な人と学び合いながら～

II テーマ設定の理由とねらい

本校では令和3年度から3年間、「生きてはたらくことばの力の育成」をテーマに、主に漢字学習に焦点を当てて研究を進めた。漢字の意味に着目させる授業内容を工夫したり、学習の基盤作りのために定期的になごやっ子漢字検定を行ったりしてきた。その結果、児童は漢字学習に対して興味・関心を高め、へんやつくりから意味を推測しながら漢字を読み、初めて見る漢字に対しても、意味に着目して漢字を学ぶことができるようになった。

しかし一方で、間違っていることにも気付かず同じ漢字を何回も書いたり、あまり効果が無くても同じ学習方法を繰り返すだけになったりするなど、自分に合った学び方を考えることができず、自律した学びにはなっていない児童がいるという課題も見つかった。また、効果が薄い学習方法を1人で黙々と取り組むことで、学習意欲そのものが低下してしまう様子も見られた。

令和5年9月に、名古屋市教育委員会より示された「ナゴヤ学びのコンパス」には、目指したい子どもの姿について、「子どもたちが必要に応じて、仲間や大人の力を借りたり、自分の力を貸したりする『ゆるやかな協働性』のもとで一人一人が自律して学び続けている姿」とある。本校でも、自分から学び、考え、やりぬくことができる、以下のような姿を見せる児童を育成したいと考えた。

多様な人と学び合うことの良さを実感し、自らを高めるために仲間や大人の力を借りることができる。また、仲間の困り感に寄り添って自分の力を貸したり、互いの頑張りを見守ったりしながら、学び合うことができる。

そこで、今年度は特に「多様な人と学び合う」要素に重点をおき、テーマに迫っていきたい。

テーマに迫るためには、多様な人と協働的に学習や活動に取り組むための場や時間を設定したり、児童に合った学習環境を整えたりすることが大切である。課題を解決するための対話活動やグループ活動を取り入れていくことで、各教科・単元で身に付けさせたい力を着実に定着させるとともに、多様な人と協働的に学ぶことのよさを実感することができる児童の姿を目指したい。

III 研究の内容

1 手立て

(1) 「多様な人と協働的に学習や活動に取り組むための場や時間の工夫」

【例】 ・選択の視覚化（「声を掛けてもいいよ」「一人で学習したい」など）

・シャッフルタイム（話し合う相手を変える機会）を設定する

・ICTの活用 ・スペースの設置 など

(2) 「学びの振り返り」

学年の実態に応じて、児童自身が自分の学び方について振り返り、次の学習に生かすことができる場を設定する。

2 校内での取り組み

【授業や特設のイベントで考えられる実践例】

- ・異年齢交流ができる学習を行う
- ・たてわり班勉強会の開催

3 評価方法

- 単元や授業時間の最後に、児童の考えを表出する活動を設定し、記述や発言による児童の変容
- 質問紙による児童（前期実践前・後期実践後）・保護者・教員（年度末）の意識調査

4 その他

保護者・地域への啓発として、学校 Web ページへの掲載や学校だより（みんなの浦里）に取組の様子を掲載する。（家庭との連携）

IV 研究の進め方

推進委員が中心となって研究の方向や進め方を提案し、各部の連携を図りながら実践を進める。校内全体で、児童・保護者・職員が理解して行っているという一体感をもつ。

全体会・・・（メンバー全員）

- 全体協議の場で、研究の進め方について共通理解を図り学び合う。
- 各部会の活動内容の情報交換、協議や検討を行う。

学年部会・・・（低・中・高・特支部会）

- 担任は前期・後期に実践を行い、そのうち1回は授業公開を行う。各部会で1学期（5月～7月）・2学期（9月～11月）に1回ずつ公開授業を行う。
- 最終報告書には、前期・後期の実践をまとめる。 **※別紙1**
- 部会で事前検討を行い、授業参観者は事後検討をする。（学年部会と有志）
- 4月、9月、2月いずれかの授業参観や学年だよりで努力点の取り組みが分かる工夫（授業実践、教室掲示など）を行う。4月・2月の学級懇談会で保護者に啓発を図る。
- 各部会は、授業日の**1週間前までに部会を開き、指導案の検討をする。** **※別紙2**
- 授業者は、学習指導案（略案）を**授業3日前までに教職員に配付する。**

V 研究組織

